

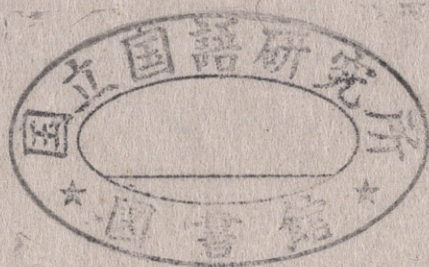
詞海

下

W
M

100

加
蓋
印
記

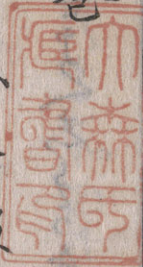


国立国語研究所



1002241261

詞通路下卷



詞てふ平波のうゑの事



きくて詞もてふはよも大なりくさうもあはれなり
秋よりあふくともいつはききとあはれなり
くよりてふは事なりけり書とて
さあく多し又人もあふくつて平なれど人のおのうゑ
きくててふはよも大なりくさうもあはれなり
いそよめめめとまれしききとあはれなり
とららのさゆとむうしよりしききとあはれなり
きくてあふくともいつはききとあはれなり

けれどもさういふにあらまてゆきそを代ふさふのあやまり
多く出来ふけるなりけりそ、次の詞のなかにもありあるは
一それうふことくううもありあるを白とされうきある
てかゝるもありてさういふとさめなれとおのつゝさ
言にある事なり是またふ時を詞とせし或は自他いり
ゆるけちあるにけり下ううきふあるきふさふ詞なく
あるはさう一とのけひさうてよふけあるけなりある
さる事なれど致さむとさういふかたけあるてえあるさ
き事なり又右歌のまをよく公ぬむははてさうとさふとの
うらふをさういふさう一の肝要なり是まそのまに註釋

○うゑち下

)

1

1

10

10

初学のため、六四の書もよく、又第六出版新書もよく、

いふのみ

ふきぬめいきんふきんうりてきなりたれ

時をたよの。——そそてさぬ——けれおなり——なそそ
てさぬ——

ふきぬさの月新さひ——さむさみ——あけぬきぬあきぬ

月新の下よ。——そそてさぬ——

時をたよの。——さむさみ——あけぬきぬあきぬ

や。助字なりあやうと相をさそて上の序なり

上の白紙をなすり
置ける。とて本歌より
踏むる本歌の

101

四
此
句
乙
子
け
る
り

新嘉のおとてのいる紫ううそめふうさ中をゆひけるう那

ううはふやれい人か着てそれうう屋の何とむたえうさ

ふれる者よなりてのまなり

ふれるひうりはとるまその目ふきうんかくそれのちうとせう

けらんをよへ何とてとつとをいれてる格なり

うゝわーもよ夜の盡をうゝ

そと傍うのちうまの人ちうためつふいさといさうそ。

の。そが。の。を。ハ。い。の。の。を。を。を。

言
凡
と
と
水
の
ひ
ま
こ
ふ
ぢ
づ
つ
な
な
や
も
ぢ
づ
つ
な
な
凡

初花の下なむとふことそてう後うゝ例なり

けふこけいあひるさきとけ路がまうー消まゝいあひるもむとんや。

や。や。や。のさよてうーくさなう。

けふのことまむあひるの時うなむくことむすきをぬけ。

うーさうーくさなう。

ねむさきとけいけうけなうさよ秋のきく紫もうけうひ。

ねむさきとけいけうけなうさよ秋のきく紫もうけうひ。

いつとこもをいふ程で序なるなり

れてそいものの中におつるや。あゝ何故や。中

うゝとて解て詞をあやちせりや。ハ歎息あり

てきふくゆふに小松のやふの松とよる所

めふけいあふやうもいふやうのふえていふやうきいふやうのやう。

う。ちうなのさ。ものやうとりやうそなたとるやう

あひえぬもうきいふやうのうきやうのうきやうのうきやうのうきやう

にえれをいふやうとりやうのうきやうのうきやう

この内ふきをいふやうのうきやうのうきやうのうきやうのうきやう

一。と助字なり 乃レをうゝゝゝ何なり

や此をとりていふを紀略に何れとふかよおせぬ

階白の下はなうんといふことをしてさねー

中々山崎のきつてあつたのせいで
 解さふとあふふふ

あふ坂を逢ふふり

〇。もろゝのさなりや。と。ハ。ひ。め。や。と。い。ふ。人。は。な。ま。は。し。ま。し。て。い。ふ。
 き。な。は。う。り。て。う。く。マ。ツ。

けむを上げ何うとふことをわけてみる格なり

[illegible]

あゝの面ふおろくもこの浮草のうへにあらねばいふまでも
うへにあらねばいふまでもあらねばいふまでも
あれやとあれとやのささるや

貸すもあゝいふまでもあらねばいふまでも
あゝいふまでもあらねばいふまでも

とさかゝるものささるや。ちのやくよのささるや

墨原の君のいふもいふもあらねばいふまでも
あらねばいふまでもあらねばいふまでも

なれやとかれとやのささるや

梅のうれしう袖ふねしほひそとをやひうのふみとてや

初白梅むのうしほふたと初を添てふとかなれと初白より
この白くそつひし四の白も伊勢初便のまをそねるなり

うめのうれあふぬきももきとあなうしうみねくものねははさ

この白者のやくまてとりふまをるの。はうのまをる

岩梅やくかされふゆふしけふてむむくされあしのかき

の。またうのまをる。皓白きまをそとくまをる

高し山ももゆるくふぶきさうやふくふくあまといくふくつ
この白いひけなりや。さういふのや。なり伏見さふふふ
とふふさうふふふふ

里にわけて月やあふめと恨てもきれはちうふふふふふふ
この白を伊勢物語のさふふふふふふふふふふふふふふふふ
こふふふ

さうふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

秋は飽きさうふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

宮門ミヤカドノノスストトノノ事コトををけけるる

いづちゆめとてまきのそとに原へて今悔む。

ニれ白む。とゞ之きをめ。とゞるを。東。ふなれ。とる。し。に。
とも。の。字。なり。

やまのうゑのそとうゑて人のちやむ

船をあらま
りしとて
ふふふふ
ふふふふ

はるるり糸よるをひてきつておむねわけふまの屋をさう

は縁の下よ。と。とそきてまぬア。う。もこれのまじり

さきこれるねのまじりもきつて今ひくはのきりちりけり

ちりふきつてはるるる人のまじりあれ屋をせぬ

後ちなせよあれぬそとつてさう

玉うろ 今もふゆとやふ凡のやうも人のきこえやうもそ

け松洞をたゆまうねうけふかゝるもあう

あひふひそ 柳やふ凡のふ袖まやうふさうやううゝるかな

かなううなうとりやうもてま格ちり

紫れ 一とゆふむう せのうまはうねううあうせうとやう

うねううハ 皆なううとつやうも

あつさう

いそのかねいふうる代ひてきねきききき

うさこそかきうてはるものうさの後のきききき

ねと後ききき

おかしききおかしきききききききききききき

きききききききききききききききききき

大系やういふれめをけやうそに神代のことゝかゝりつらめ
やも石偶よりいふことあり

みづかきめがききとて白雲のうらやけはるるきいふやう

いさめうらやめのかききとて白雲のうらやけはるるきいふやう

郭のいふやうなところから、あつたやうなところからやねえ

あつたやうなところから、あつたやうなところからやねえ

あつたやうなところから、あつたやうなところからやねえ

あつたやうなところから、あつたやうなところからやねえ

身はれ流るをれてきくゆいゆいのやうさ

いづれ若れ使ふゆいおふてきくゆいのやうさ

あつて若れ使ふゆいのやうさ

のきこのきこのきこのき

束の蔭にとれあつてや世の中のおくはさきしめしきなり

初二のうい束の蔭にとれあつてやのこをり

あつては後志のくや神のまをむしきれおとるるを

神代よりけあつてや八束穂の田の稲はまゐるを

現もも愛よりこれをも
あきらむべき
あきらむべき
あきらむべき
あきらむべき

誰そけ家の戸をあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

このふれはよきこと

今もも愛よりこれをも
あきらむべき
あきらむべき
あきらむべき
あきらむべき

あゝちやと名よこさう
それ極むとふれなる人むすちけり
もちけりを極むと名よこさう
それとふ

ちやと名よこさう
それ極むとふれなる人むすちけり
もちけりを極むと名よこさう
それとふ

あゝちやと名よこさう
それ極むとふれなる人むすちけり
もちけりを極むと名よこさう
それとふ

秋をてあゝちやと名よこさう
それ極むとふれなる人むすちけり
もちけりを極むと名よこさう
それとふ

あゝちやと名よこさう
それ極むとふれなる人むすちけり
もちけりを極むと名よこさう
それとふ

ふー^に飽^くぬ^を あの^に小^をさ^をの^にう^をり^をも^をう^を とれ^のち^をや。 一宿^をと^をう^を。

ふーは伏るをう杯低は荷をうの夜は毎のうをうのう
やい歎息をうふふなううのさなう杯の下よにとーを添てまー

[illegible]

新のつよをきくをきいてきく

うゝもや 從^レを^レも^レい^レのむ^レ於^レ死^レ生^レの^レ路^レを^レい^レえ^レわ^レる^レつ^レき^レえ

月をいぢるは物こそなるれ
家身一つは秋の月あゝ移り

ちやう
神代もさうに
主田川にうづれなるかゝる

川の下のまゝをさうさうと
なすてゐる

夕暮のくものゝうへに
あまのつばきいゝ

之傷めいふふゆゑむいふも存ねる人らありてやむこと
いの下はに——とてきふ——

吹雪ふふや風を吹む秋とすれうづもゆく。ひとめうづゆめ
この白のちのやうのささりうもささるのささり

あやうふなをむき——是をこれとれそ人の老とならぬもの
ふのささるれといふささり残るのちよかれむといふことをさして
こころは——

近江より船も来れはるのゆふしつを写せる『あけぬ』け夜ハ

そつふあつてもあつてふあつてるなり『小田の姓のタつれぬ』え

夢をうてはととてなれそつてつてつてつてつてつてつてつて

雨ふれ小田のゆふしつを『あつて』あつて『苗代』をうてふてつて

や。とあつてつてつてつてつてつてつてつて

あけのほれかうりそと
はもどぬ
ゆふとくもけり
もろ夜たうふ

とまう
あけのほれかうり
の都さ
とまぬ
あつと
とまふ
のこ
て

うねさ
とまぬ
のほれ
とまぬ
やと
う。
月の袖のせと
ふ

うねさ
とまぬ
のほれ
とまぬ
やと
う。
月の袖のせと
ふ

タ
これの下は
ま
と
り
こ
と
を
そ
ろ
て
き
ぬ
て

忘れても折が来るやゆふが
家のいぢやうてやうなる月日を

とてふや
[二] ちふちをすてのこえや
[一] ちの井ふたきみ

四のふ
 ソ
 一
 け
 二
 そ
 や
 む
 三
 う
 け
 れ
 四
 の
 五
 ま
 六
 ち
 七
 り

書

三

五

客

くうな 尾ふうの 思ふちやー 思ふの けふち へいふ

あひふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち

あひふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち

思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち

思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち

思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち 思ふち

さういふあは『善』はとせよとちの事なむぞう
志も助まらり

あはのうとせよとちの事なむぞう
『け』はとせよとちの事なむぞう

初めとせよとちの事なむぞう

あはのうとせよとちの事なむぞう
『あ』はとせよとちの事なむぞう

さういふあはのうとせよとちの事なむぞう

みづの煙

張白の下より。

あなれと

踏
 白
 の
 下
 よ
 る。

王中丞

是も酷下の下よ。

初巻のあき

踏白の下よこをそてきぬア

卷之五

諸君の下のところまで
 下りて来よう

きくえいひね うろうろ 人の秋のふしを

之れ白秋は飽をうゝうゝうゝのうゝひひをう

永唐をこゝろゆゑとこひ——いひつゝの事なせ[〓]物づくるや

酸白の下よそと——をそけてさぬ

あれよりを志加えのむきゆれうふ[〓]ゆれうふ[〓]むき[〓]ゆれうふ[〓]

酸白の下よなれとつゝこをそけてさぬ

ちうもなよ[〓]志の葉なれうゆ[〓]ても[〓]ゆ[〓]うき[〓]袖のう[〓]うは

酸白の下よささあつたれとつゝこをそけてさぬ

な 新波の秋代をすのうとくふさ月だとも

これ白の下よ。とーとーとーとーとー

袖ふけ さそ風篠森のゆめわうー おもひこころかゝる浦丸

これ白の下よ。とーとーとーとーとー

うさふれ 葉るゆとひいそつこれなむなうけや おき川白浪

これ白の下よ。とーとーとーとーとー

この君を
み代め八千代よ
あけ石の巖と成てあけのむすまで

八千代よりよせとつふさるり

君を代もく
くーい
くさひや
千代の川に流さくえさせて
や。さひやーのやるり



免ていまだ清世にやむことなれと云うゆえなりて
ゆえつて歎まじひの事もいやさうしてよくおひとのまゝ人
の世ふ多うめれとわづれとせしめさしはなふそめしあな
てあるに文字うくことを知してそよそよあつちをれして
えせきせあしとせしめしうへのうさになく又まゝむ人にと
そよそよとてそよそよとせしめしむそとせしめしと
なりなきとせしめしなりとせしめしなりとせしめし
ゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつて
ゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつて
ゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつて
ゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつて
ゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつてゆえつて

うさふふの程うちあはしき悔なれどもたゞとあ
かつやうへ入る人もあるもあはれなりたのこゝとあ
けりあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
ふとあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
いそとあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
とあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
のさむさふに利てあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
うさふふの程うちあはしき悔なれどもたゞとあ
つとあは入る人もあはれなりたのこゝとあ
すとなれどもあは入る人もあはれなりたのこゝとあ

人よりちつとなりてたよりしき事おつらなける年
なともいひきつよふやまゝ又その人もおほめしむなれといそ
と思ひてさうき事なといひあせおしなすくられおのろ
うりやふは使ふもいひやさうとてさうなすともいふさ
はらむあり何事もあやうといひ合せつゝなふよは
使ふてなすともいひやまゝ是れなうたよりしき事
さうさうゝ又精おしむもけむひつて来てさうむとめ
なれとおのろともいひあせおしなすくられおのろ
さうさう退屈といひてさうおのろやまゝ一友あれいひき
ふてられいひむことなすくけれとおのろさういひてさうある

[illegible]

○二二五

さへて歎も救多くもいづるや一なれとさつそのさまで
たふはゆよむしきとあやううめれを多くよまされと相
のいやうなりけりやけ難うかて昨の件よりいづる相して
添割とさひ何てもあはさる事とさひきといふたふさるを
もいつとあはさる事とあはさる相もいづるかたれとく
あねともねとのなうさるふはあのもあねといふと思ふさ
事をいづてさひきとあはさるなれと決ていふやうと思ふ
あね昨う人といふてもいづる相もいづるやうと思ふ
なれといふかといふきといふさるやうなうなれと思ふ
こいなれといふねをいづていふふあはさるこいといふ
あはさる

さて木のやうに思ふは歌は作例ある事なりを他例は
よりて是よりこれ極よとてよとて思ふべきはかなを
他例といふはむ郭六郭五月ハ月言ハ名とおのくを物よりりてを
よむべきはあつゝ大低定まりあるをよみなりそとて
よりみるゝひまれの言ふもとて知てゝこのやう作例をむ
ねとてそれよりこれとてなむやうよみてそとて言ふ
思ふをそのつゝよまはあてんの外れこそとて思ふ
事と思ふ人もあるとて思ふはあてんをあるとて思ふ
ね思ふよむやうな歌ては歌やふんのよふつひてそとて思ふ
して思ふをそのつゝ思ふは作例よりこれとて思ふは思ふ

かなたうふことわざと初学のふつうのふしやうをて作
候よりいふていひまみやひるに信なる事なり春庭
なる人のあを多しふ言候されどかく作例よりこれ
たうとやうふとてつる事なり

○右今集以後のそれ等のもとて何れもなともいふれ集より
出する事なれども統て何れもなともいふれ集より
いふれ集よりいふれ集よりいふれ集よりいふれ集より
後撰集拾遺集なるもあふ不款なれども多し是等も
いふれ集よりいふれ集よりいふれ集よりいふれ集より
さういふてさういふてさういふてさういふてさういふて

世にかなうけものもあつたこれ

○歌を何うもほくきくもあつた身一の事なれをなぶるも
と権ひいさうもあつた身一の事なれをなぶるも
何うも一そきくもあつた身一の事なれをなぶるも
さるりかき又きつひもあつた身一の事なれをなぶるも
よくもあつた身一の事なれをなぶるも
あつた身一の事なれをなぶるも
月ひさつた身一の事なれをなぶるも
あつた身一の事なれをなぶるも
さつた身一の事なれをなぶるも

[illegible]

さへはなれとやと——二つあるをば使うに又のと——も次は
多くかきなりいふをば使うに又と——かき解ていふはほき
事なりくありはとされし年ものなりき。文字く——
なとのまじりかきなりいふをばとてはまじりつねのなを
よしてとまじりてふもつねなりてまじりつねなる文字を
んまじりきことなりき。字のまじりいはい。ふ。の。四。字。多。く。を。白。の
なりつねあることなりてか——らなはつ。はけ限はありけ。四。字。れ
かきまじりけ。い。ふ。ま。じ。り。き。ことなり。又。ふ。の。四。字。の。中。も
何ふまじりてまじりつねもあり。こ。の。灰。ある。こと。なり。く。ま
か。ゆ。れ。と。い。ふ。も。の。老。く。と。い。ふ。も。の。ま。じ。り。つ。ね。も。ま。じ。り。つ。ね。と。い。ふ。も。の。

月少くうけたり又右より法式なしく大なるまゝくおほ
る中より月少くも事ともうけられ又月ひさしくても
事とも多しといふのうづらまはさし出さるるなり

○後世に歌詠をうけつゝきかへてうけをある事少
うれを物とてふるを同れよとまはしくことふれ物を
ふれとふることのよきことは歌あつてもふゝきと歌詠は
附さる歌をまうけてふむ事なれとて題のゆるげ動うさる
るをむねとふきこねてうて海なうとうといふあつた
る海山よつとてうさるをうけてそのよきとあつたきなり
海山とてうさるそのよきなりといふ歌うさる海山といふ
位なり

[illegible]

なりてゐるをさへおのつゝそのひの活るゝとをさへ
さふことなまめれと探とのひるなるひるなまめれ
くきやうくきやうくきやうくきやうくきやうくきやうく
を解—詞のさへひさよてをさへつひやなまめれく
くきやうくきやうくきやうくきやうくきやうくきやうく
款—れつゝやうくきやうくきやうくきやうくきやうく
くきやうくきやうくきやうくきやうくきやうくきやうく
實のふさきやうくきやうくきやうくきやうくきやうく
さるゝさるゝのさへいさうくきやうくきやうくきやうく
さるゝさるゝのさへいさうくきやうくきやうくきやうく
さるゝさるゝのさへいさうくきやうくきやうくきやうく

用ひさうなふなれしることなれとおのつゝを城の意味を
よく辨へんえおのつゝしるす歌の意味の初はひ証さす事ハ
おのつゝをむ人をおのつゝよくあつたき事なり

○學問をもととし利のふふはけはさうもあつたさうも
よく又さ中ふれりあはれあはれけりさうはあつたさう
かのあはれをあつたさうけりさうはあつたさうけりさう
らけりさうはあつたさうけりさうはあつたさうけりさう
さやうの人ハ必はれしことをえせられしとて出て是といふ
さうのあはれハあつたさうけりさうはあつたさうけりさう
事なふさうさうハあつたさうけりさうはあつたさうけりさう

習ひおつていつとむ時ハ切續けて之をやる人よりハ
まづ此中よりてよく出来る物なりといふはよくいふはれき人
なりといふはよくいふはれき人なり又晩學とてこれより
はめいぬ事と云ふとそれよりいふはれき人なり
つとむはよくいふはれき人なり又晩學とてこれより
はめいぬ事と云ふとそれよりいふはれき人なり
つとむはよくいふはれき人なり又晩學とてこれより
はめいぬ事と云ふとそれよりいふはれき人なり

○此は歎く事なりと云ふ人なりと云ふ人なりと云ふ人なり
と云ふ人なりと云ふ人なりと云ふ人なりと云ふ人なり

とさ人にも達者なりてありおあるもつる見當はれなりていふ
もあつていふされともいふもいふも計はぬていふはあつそ
或も二枚百の金なりていふもいふもいふもぬていふもあつ
いふれと不達者なりていふもいふもいふもいふもいふもいふも

○よめる歌は西のぬきあはぬあつていとあつるなりふ
あつる海幸と人ふていふもいふもいふもいふもいふもいふも
つていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
あつるいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
あり又地端のいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

せよきれえたるひまうたるふといはれとなうとやま
 うり又一そのこれと又やうなる又何ひうり又上下に合
 性うりふとかく個ひさまやううりなふうりよて
 よううりうりうり多き中ふふと統さうひさなとさうきよ
 まーれうりうりうりなるもの二つともよ今一きえ格あよ
 ふと月ひ格あうりつとめさひなき地場の垣一きえいふく垣一
 かりもてりて中よあのうりうりうりうりうりうりうり又
 地場のあうりもあつうりうりうり中のかきとふと行はう
 うりなうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
 うりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

○つちち下

[illegible]

とひ あつてな なるものな なるものな なるものな なるものな
ふりて あつてな なるものな なるものな なるものな なるものな
いふきを 四つて一字いふ 横ハ 包よ。をなすなり
を加へなす なるものな なるものな なるものな なるものな
やふきなる なるものな なるものな なるものな なるものな
をさへ なるものな なるものな なるものな なるものな
かへ なるものな なるものな なるものな なるものな
なるものな なるものな なるものな なるものな なるものな
事なるものな なるものな なるものな なるものな なるものな
とく なるものな なるものな なるものな なるものな

○宗元はつゝもせむ詞のやちをいふに多くむつゝ
 といふかきも物よきなり。かれ今まかりて思ふ
 所とんね辨へしむるふしうきとてなりけり
 けちちよきなりとていふととていふなり
 うゝゝ物言式を記録式に改めたる書面文
 なるは、わづらひしむるをやうの書なりとて
 てもききしむるなり。一言く事とていふ
 とて始終小押後、いふ事なりとて一言といふ
 事なりとていふ事なりとていふ事なりとて
 入るなりとていふ事なりとていふ事なりとて

○うゑひち下

やちまにけさまを辨へまむと名く足五十音を操五一一

何くもいふてとやうに思へるアイウエオを
阿行カキクケコを加行サシスセヲを依行タチツテトを多行ナ
ニヌネノを奈行ハヒフヘホを波行ミムメモを麻行ヤユエヨ
を也行ラリルレロを羅行ワヰウヱヲを和行サセオの音は
アカサタナハマヤラワオニの音をイキシチニミイリヰオ三
の音とウクスツヌフムエルウオ四の音をエケセテネヘメエレエ
オ五の音をオコソトノホモヨッラ右等の事をどくと云ひて
譬を以て阿行としく阿行の文字加行としく加行の文字なると同
のもうようといふ又オニの音としくイキシチニミイリヰオ

ことどもをとりとて是にて後活句のさをもとめしむ
なりその活句も四段の活句一段の活句中二段の活句下二段の活
句の戸種なりけ活きこよ、やちよふ不_レ要しくいひされと種
中より一へ——さて四種の活句をわらうまよふなうして上
とを以てともさうふるつ肝要なりうゝてよそはよく知て是
も四段の活句は一段の活句是と中二段の活句是と下二段の
活句とともちある事なりそ八段の活句も才一の喜力廿々ハ
二。三。よりん。のてよそをうけ一段の活句中二段の活句も才二の
喜キチニミイリ耳よりん。のてよそをうけ下二段の活句を
才四の喜エケセテネヘメエレエよりん。のてよそを受ふる

宗門の事、一つとて、
その事、
其の旨を口して

宣。ゆ。ゑ。と。る。り。け。宣。ま。り。ふ。一。つ。と。た。う。ふ。事。な。う。四。股。の。活。詞。を。加。行。
 う。そ。と。あ。え。ん。う。こ。う。ん。ゆ。う。ん。右。の。や。く。何。事。も。才。一。の。喜。か。新。
 ん。の。て。よ。そ。と。受。れ。を。飽。初。行。な。と。も。加。行。四。股。の。活。詞。な。り。佐。行。よ。
 て。と。あ。さ。ん。え。さ。ん。く。さ。ん。右。の。や。く。才。一。の。喜。廿。う。う。ん。の。
 て。と。と。と。う。れ。を。押。返。當。な。と。ハ。佐。行。四。股。の。活。詞。集。な。り。多。行。
 う。そ。と。う。ん。か。さ。ん。ゆ。さ。ん。右。の。や。く。才。一。の。喜。タ。う。う。ん。の。て。ふ。
 を。と。と。う。れ。を。打。勝。待。な。と。も。多。行。四。股。の。活。詞。な。り。波。行。よ。て。ハ。
 い。と。ん。う。さ。と。ん。ね。う。と。ん。右。の。こ。と。く。才。一。の。喜。ハ。う。う。ん。の。て。よ。
 を。と。と。う。れ。を。と。海。歌。な。と。も。波。行。四。股。の。活。詞。な。り。麻。行。よ。て。も。
 う。ゆ。え。ん。く。ゆ。え。ん。す。ま。ん。右。の。や。く。才。一。の。喜。て。う。う。ん。の。て。よ。と。と。と。

う。れ。く。産。汲。位。な。と。も。麻。行。四。段。の。活。句。な。り。羅。行。う。て。も。あ。ん。
つ。ん。ふ。ん。右。の。や。く。才。一。の。言。う。う。ん。の。て。ま。と。を。受。れ。て。
知。的。路。な。と。ハ。羅。行。四。段。の。活。句。な。り。一。段。の。活。句。も。加。行。う。て。も。
き。ん。奈。行。う。て。も。ふ。ん。波。行。う。て。も。む。ん。麻。行。う。て。も。え。ん。也。行。う。
て。も。い。ん。和。行。う。て。も。み。ん。右。の。こ。と。く。い。て。皆。そ。の。行。の。才。二。の。言。
き。二。に。い。ふ。耳。う。ん。の。て。ま。と。を。う。れ。く。若。似。于。見。射。居。な。と。
一。段。の。活。句。な。り。ハ。活。句。も。才。二。の。言。一。言。の。こ。な。れ。て。い。と。か。な。り。
中。二。段。の。活。句。も。加。行。う。て。も。お。き。ん。ま。き。ん。つ。き。ん。右。の。や。く。才。二。
の。言。き。う。う。ん。の。て。ま。と。を。受。れ。て。記。さ。そ。な。と。も。加。行。中。二。段。の。
活。句。な。り。多。行。う。て。も。くら。ん。と。ち。ん。え。ち。ん。右。の。こ。と。く。才。二。の。言。

の活細なり下二股の活細を所行してを えん。右のやく才四の言
工よりんのてををうくれと得を所行下二股の活細を紫が利
加行してを うけん。うまげん。つげん。右のやく才四の言。う
んのてををうくれと受助蹟なとを加行下二股の活細をう
佐行してを あせん。うせん。やせん。右のやく才四の言。せ。ね
んのてををうくれと合失瘦なとを佐行下二股の活細をう
多行してを いてん。まてん。へてん。右のやく才四の言。う
んのてををうくれと出於隔なとを多行下二股の活細を紫なり
奈行してを かさねん。うねん。ねん。右のやく才四の言。え。う
んのてををうくれと金取寐なとを奈行下二股の活細をう

んのてうきえんとうくわくを不病なると奈れん二川のいふ

波行うても えんつゝんへん右のやく才四の喜へううんの
てうきえんとうくわくを替仕座なると波行下二候の活詞なり麻行
うても さめんまめんやめん右のやく才四の喜へううんの
てうきえんとうくわくを足進止なると麻行下二候の活詞なり也行
うても きえんこえんさうえん右のやく才四の喜へううんの
てうきえんとうくわくを消滅なると也行下二候の活詞なり羅行
うても かれんなうれんふれん右のやく才四の喜へううんの
てうきえんとうくわくを枯流觸なると羅行下二候の活詞なり和行
うても うえんうえんはえん右のやく才四の喜へううんの
うてもと受れぬ桂鉄君なると和行下二候の活詞なりさう羅行の

活詞と加行してをカキクハ波行してハハにフへとを行の身二れ
喜より次身は四股よりなる一肢の活詞も奈行してをニ
ニルニレ也行してをイイルイレと活きてま行の身二の喜れ
して一肢の活る中二肢の活詞も多行してをナツツルツレ
麻行してをムムルムレとま行の身二の喜身三れ喜と四肢の
活の中二肢は活くなり下二肢の活も衆も佐行してをセススル
スレ羅行してをシルルレとま行の身四の喜と身三れ喜と二
肢は活きて四肢の活の下二肢なり木のうち一肢の活詞中二肢の
活詞下二肢の活詞ふ・字を付するルレとそてんる文字な
りけことやちさくきくきくきくきくきくきくきく

四種の活詞をうろこと才一の事なれど又うろことしたとハ
 書嘆なると何の活き聲そいつや か。ん。うき。う。み。
 何。ん。さき。さ。う。げと活きや加行の才二の言か。う。ん。の
 て。も。を。受。て。か。キ。ク。ケと活けハ加行四種の活詞なり又思通なりハ
 何の活詞そいつや お。も。ん。み。ひ。み。ふ。み。く。う。ろ。ん。う。ろ。
 う。ふ。う。ろ。と活きて波行の才一の言ハ。う。ろ。ん。の。て。も。を。を
 う。け。て。ハ。ニ。フ。へ。と。ろ。ろ。う。け。と波行四種の。う。ろ。き。詞。なり
 他見なると何の。う。ろ。き。を。聲。そ。いつや。ん。う。ろ。み。れ。み。ん。
 み。れ。と活きて奈行の才二の言ニ。麻行の才二の言ニ。う。ろ。ん。
 の。て。も。を。を。う。け。て。う。ろ。と。れ。と。波。り。て。奈。行。麻。行。の。二。種。を

活こゝろなり又落恥なと何の活相そとつや おらん おつ
おつ。 おつれ。 いちん。 ころ。 ころ。 ころ。 ころ。 と活きそ多行の身
二のまじりあんのてまをさうけてつと二股は活けも多行中二
股の活相なり又赦舊なと何の活相そとつや ゆりん
ゆ。 ゆ。 ゆ。 りん。 りん。 りん。 りん。 りん。 と活きて羅行の
身二のまじりあんのてまをさうけてつと二股は活けも多行中二
股の活相なり又任瘦なと何の活相そとつや まっせん。 まっせん。
ま。 ま。 ま。 りん。 やせん。 やせん。 やせん。 やせん。 と活きて
佐行身四れまじりあんのてまをさうけてつと二股は活けも佐行
の二股の活相なり又妻譽なと何の活相そとつや せめん。
の二股の活相なり又妻譽なと何の活相そとつや せめん。

んのてよと四よりうくるを二服四服を一々喜ぶ利そつ
 一服と中二服とを二々喜ぶんのてよをそてつふなり
 又四服の活詞を才三々喜ぶり辨言よつきて 子。凡 子。後。機

やう。人なすといひ一版の活字を才二の言ふなりとて辨言は
續くもなり。又。月。つ。矢。な。といひ中二版の活字と下二版の
活字を才三は言ふなりとて辨言は續くもなり。お。く。新
く。ん。な。といひ。う。く。後。つ。く。丹。さ。む。後。な。といひ。う。く。さ。
す。う。と。さ。と。又。ふ。れ。の。文。字。を。才。二。の。言。ふ。と。て。は。さ。ら。に
三。葉。を。一。版。の。活。字。を。才。三。は。言。ふ。れ。の。文。字。を。と。て。さ。ら。に。か。き
こ。と。と。中。二。版。の。活。字。と。下。二。版。の。さ。ら。に。き。き。三。葉。を。ち。り。

ふ。れ。の。と。一。は。さ。さ。く。と。か。さ。と。さ。も。才。二。は。言。ふ。と。て。一。版
辨。言。を。と。り。利。り。を。四。版。を。二。は。と。と。て。つ。か。を。一。版
に。は。言。ふ。り。と。と。て。辨。言。は。く。と。お。と。と。と。中。と。下。を。ち。

これきふるゆゑをそて能くいへるは中の人

又すてたけする。詞を四段の活ハ身四言とする。 又すてたけ。
其ともよき。な。二段の活中二段の活を身二言よより。
そきて。ふ。や。な。二段の活を身四の
きふ。より。そきて。や。や。ふ。代。ふ。な。より。さ
ふ。お。は。する。詞とを。つ。あ。ふ。下。知。の。詞。なり

四れき。を。四。段。を。よ。ふ。下。知。なり。二。段。よ。を。そ。て。つ。
一段と中二段とを二れきより。そきて。下。知。と。す。なり
又阿奈也。和の四行よ。を。四。段。の。活。詞。なり。阿。佐。多。羅。の。四。行。よ。
一段の活詞なり。阿。佐。奈。の。三。行。よ。を。中。二。段。の。活。詞。なり。二。段。
の。活。を。禁。ハ。こと。何。れ。な。め。の。こと。と。なり。も。う。一。こ。ろ。之。

カ行四段
ラ行四段
ハ行四段
サ行下二段

まゆなう なくきれん あゝと ねがひ ながく ながく ながく ながく

ハ行中二段 日
カ行四段
タ行四段
ラ行四段
カ行下二段
ラ行四段

こひく てりや ながく ながく ながく ながく ながく ながく

カ行四段
ラ行四段
タ行中二段
ハ行四段

ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく

カ行四段
ラ行四段
カ行四段
カ行四段
二行一段

ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく

ハ行四段
ラ行下二段
ハ行中二段
ラ行四段
カ行下二段

ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく ながく

八行中二股 日

各行四股 十行下二股

力行四股 八行四股

こゝろをてうちめる中よゆき海ふまけしうちを現なうちむ

力行四股

各行四股 う行四股

二行股 力行四股

う行四股

石るゆきの浪しうちめるかきそきえりあふくしうちを

十行四股

八行四股 力行中二股

八行下二股

う行四股

うてきおきうちめる美代を耕そきしうちを水石のしえ



須受能耶藏板

3

8

261